

二〇一二年十月二十六日

地域福祉を支える市民協同パネル・世話人会

第三回座談会

「生協の地域での関わりをていねいに視る」

座談会

進行役：仲田伸輝さん

報告者

① コープあいち コープ相談センター 河田悦夫さん

「地域における支えあい事業ーコープあいち・愛知県協働事業」

② NPO法人MもM(窯の広場) 服部悦子さん

「瀬戸の福祉まちづくり」(スライド)

③ 名古屋大学 研究員 前田洋介さん

「ローカルな市民活動を支える仕組みと担い手に着目して」(スライド)

・・・多摩市のNPO(生協関連)

④ 南医療生協 地域ささえあいセンター 土屋 誠さん

・・・南医療生協の地域ささえあい事業(ささえあいシート)

●向井：今日のねらいは、地域において協同組合がどういう役割を果たせるのか、その地域の市民協同組織が地域福祉にどんなふうに関わっていくかを明らかにすることです。自分が関わっている地域の問題や、地域の中で多様なNPOや住民組織、みなさんの動きがつかめればと思います。

加えて、そこでは、協同組合がどういふふうに見えていて、協同組合にどんな可能性があるのか、協同組合と付き合いのにはどんな課題があるのか、協同組合へのコメントもしていただきたいと思います。そのことによつて、協同組合が地域に関わる場合、住民が全部組合員であればいかとうとそう単純ではなくて、その中で協同組合の組織や法人としてのルールがどうなっているかが当然関わってくると思いますので、そういうことを念頭に置いて、それぞれの取組とそこから見えた協同組合についてお話しいただきたいというのが企画のテーマ設定です。

では、今日の進行は仲田さんをお願いします。

●仲田：今日は3回目になりますが、初めての方もいらっしゃいますので簡単な自己紹介から。

●河田：コープあいち、組合員の相談。

●服部：NPO法人M t o M。

- 前田：名古屋大学の研究員。地理学が専門。特に地域コミュニティや市民活動について。
- 土屋：南医療生協で地域ささえあいセンター。

去年から地域ささえあいセンターに、それまでは組織部

- 椋木：事務局

- 松浦：コープあいち組合員

- 内藤：コープあいち組合員

- 津坂：ワーカーズコープセンター事業団組合員

- 飯村：コープみえ組合員

- 豊田：NPO法人仕事工房ポポロ（ニート・引きこもり・岐阜）

- 向井：コープあいち、地域と協同の研究センター

- 仲田：地域と協同の研究センター

- 伊藤：コープぎふ組合員

- 仲田：では早速、コープあいちの河田さんからお願いたします。

●河田：地域の支え合い事業について。

生協に入って38年になります。

地域における支え合い事業ということで、昨年から愛知県が予算をもって地域の支え合いを今後どうしていくかということを進めています。今年はいくつかある中で、コープあいちのこの間の取り組みについて、地域における支え合い事業ということで、一年間モデル事業として県の選考に受かりました。コープあいちと愛知県の協働事業で、政府の新しい公共政策に基づいた新しい公共支援事業です。先ほど地域福祉ってそれイメージが違うんじゃないかという事もありましたが・・・。私も2000年から福祉分野に取り組んできて、やはり地域福祉というのは、高齢になったり障がいがあったりしても今住んでいる地域で暮らしている関係を作っていく・・・。それも誰がやってくれるということではなくて、地域の住民みんなが主体的に作っていくというふうに考えているんですね。だから今回の地域支え合い事業も、生協が関わって、そういった地域の中で何かお役立ちができるかどうかという視点でやっています。

この事業の目的は三つありますが、一つはいろんな社会制度がある中で、制度の谷間があって、恩恵を受けられない方はたくさんいるわけです。そういう人たちの支援をどうしたらいいのか。二つ目は、地域といっても以前の地域とは変わってしまって、「隣の人は誰？」という関係になっているので、顔の見える関係は非常に重要だと思っていて、相互のネットワークをどう作っていくか。三つ目は、いろんな情報があるわ

けですが、介護保険の情報もまだ知らない方も実際にはたくさんいらっしゃるわけですね。そういった情報だとか、インフォーマルな情報、これは特にわかりませんけれども、地域の中で共有していく仕組みが今後必要ではないかということです。この3点を1年間の事業の中で追求してみよう、ということを取り組んでいます。

具体的な取り組みとしては、最初に5月にフォーラムを行いまして、行政、社会福祉協議会、地域包括支援センターなど、幅広い方に集まっていたいただいてキックオフを行いました。この事業の中心はモデル地域を設定して地域会議を開催する、その中で具体的に検討したものを全体に持ちよって全体会を開催する。年4回くらいのサイクルで実施しよう。調査も大変重要なので、地域福祉力の調査やニーズ調査だとか、それをどう解決していくかというような調査を考えています。先だって、情報の共有ウェブサイトを開設しました。コープあいちのホームページにある、地域支え合い事業のバナーをクリックしていただくことができます。みなさんが意見を書き込んでいただくこともできます。

1年という大変短い期間ですが、最後の着地点はロードマップを作ります。愛知県からは「1年で終わってもらっては困ります」と言われているんですね。「継続してください」と言われているので、「何をどういふふうに継続していくか」と「構程書を作ります」というお約束していますのでまとめたい。こんなふうに取り組んでいます。

最初についているA3の資料に盛り込んでありますので、そちらをご覧くださいただければと思います。

資料にあるようにモデル地区を五つ設定しております。そのうちの一つは千種区本山地域会議。ここは生協の相談という活動取り組みが20年来ありますのと、生活支援という事でいろんな団体があって、ネットワークを作ってきています。守山区の小幡にあります地域会議が二つ目。ここではお店を中心にしまして、相談窓口としてのサロン活動である、いっぶく茶屋というのを毎週取り組んでいます。これが大変地域に密着して来ているということがございます。三つ目が緑区の大高地域会議。今日ご参加の南医療生協さんや森の里荘自治会が中心になりまして、医療、障がいの分野での取り組みが大変進んでいます。これが尾張地域での取り組みです。あと二つは三河地域のことで、豊橋の舟原地域。ここはこじんまりした地域なんですが、タウンビジョンを作っていて、その一つとして高齢者の見守りをとつするかというテーマです。

五つ目は、これは大変広い地域ですが、奥三河中山間地域会議で、高齢化過疎化のなかでの町と村の連携ということ、大変生協が期待されています。

愛知県は健康福祉ビジョンという新しい地域政策を作って、その中で地域の課題解決の主体として各種協同組合が明確に入れられた。生協は大変期待されているんです。その中で生協としては、状況に応じて関わり手や役割をコーディネートしながら対応していくことが重要で、コーディネートを生協に期待したいということです。

それでは奥三河の事例について報告。ここは新城市となっておりますが、鳳来町も含んで、設楽町、東栄町も入ります。この地域会議にお集まりいただいたのは大変幅広くて、豊根村の役場と社協、設楽町の役場と社協、東栄町役場と社協が参加、ゆたか福祉会、JA愛知東、設楽町のNPO法人、コープあいちからも多数参加しています。ここは、大変高齢化過疎化が進んでいる地域なんです。JA愛知東が住みやすい地域にしているということ、フード（食料）、エナジー（省エネ）、ケア（介護）という三つのカテゴリー分野について調査したわけです。課題も明確になったんだけど、いざ取り組もうとするとできないということ、困っていたけれども、コープあいちがこの支え合い事業の話をしたら、「ちょっといい、一緒にやってみよう」ということになりました。今進めております。当時のめいきん生協との関係で、きらりんとコープ福祉村もご参加いただいていますし、いろんなNPO団体もご参加いただいています。

そういう中で、地域住民のたまり場、サロン、たすけあいの組織を作ろう、農協さんの使っていないところを使って、村をおこしている、仕事を作っていることを中心に検討しています。

そんな中で生協としても、新城センターが対応していますが、何ができるかということ、一つは商品を配達して、買い物に困っている方がたくさんみえますので、そういう人たちを支援していること、集落は点在していますので効率は悪いです。一か所に荷物を降ろして、地域のかたにお出でいただいで分けていく。そこに一つ仕事が起っていくんじゃないかということや、荷降ろし場をたまり場にして高齢者のサ

ロンにして、皆さんの見守りと元気を作っていくというふうなことができないか、という検討をしています。各役場や社協さんの期待も大変高くて、あと3か月ではできないですけれども、見通しを作って次につなげていくということがいいんじゃないかなと思っております。

そんな点で一年間の事業ということですが、一年で終わりでなくて来年再来年ずっと続けられるようなことを目指しております。

最後に、私も千種本山地域の地域会議を運営しているんですけども、大変難しいですね。やっぱり地域でいろいろやっていくというのは。もともとここは組合員さんが作ってこられているんですけども、地域の主体は、一つは町内会や民生委員さんとか既存のみなさんがみえますけれど、生協がこういうことやります、やりたいですと言っても、すんなりとは話が進まないんです。生協は一企業だとみられる場合が多いわけですが、事業をやっていることもありませんが、もう一つは、組合員の活動とかいっしょに地域を作っていく、ということも今力を入れてやっているわけですね。ビジョンの中にちゃんと入っています。だからそういう意味では、それをわかっていたただくためには地域のみなさんと一緒に汗を流してやらなきゃ理解し合えない、分ちあえないということが実感としてわかりました。

私も昨日も地域の防災委員会というのを自主的にみなさんとやって、夜の7時から2時間ぐらい、これにメンバー登録をして参加しています。なかなか大変ですけどもそういうことをやっていく中で、生協ってほん

とうに地域のことをやる意志があるんだなというふうにわかってもらえると、そういう中で関係作りができてくる、そんなふうに思いますので。なかなか生協の職員も仕事、仕事で自分の地域を振り返ることができないので、仕事が一つの区切りになった時に、地域を見てみて自分の果たせる役割があるかなということを考える必要があると思います。

●仲田：次は服部さん、お願いいたします。

●服部：窯の広場を建てました。目的はつなぐことです。これからはこういう協同の場が必要だろうということ。」「こういふような関係性かな?」「ってことで、建屋を建てました、商店街。」「どうやってお金を出しているの?」「建物を建てた時にチンドン屋をやりました。みなさんから寄付をしてもらって、延べ850人くらいの力でボランティアで建てました。万博期間中も建てていました。実は毎年建てていまして・・・。毎日健康ランチを当番制で、生協の食材と地元の野菜で、最初は380円でやりました。大きなテーブルでみんなで食べるので、いろんな人が集まってきてご飯を一緒に食べる。

あと、イベントの場として、この建物自体が私たちが占拠する場所ではなく、自由に使える空間をというこ

とで建てましたので、公民館だとか行政のものだといろいろ制限があるので、「何でもいよいよ」という場所を

作ろうということでは建てました。

あと、便利屋です。今年の1月、佐藤さんが専任の事務局という形になってから、便利屋の仕事は毎日うなぎのぼりで依頼が来る。

野菜市、地元の野菜を作っている人をつなげて販売しています。窯の広場だけではなく、いろんな場所です。その先につながったのは、市（いち）といっても野菜だけでは市（いち）というイメージがないと思ったので、「市をやらぬ」と若い人たちに呼び掛けた。月に1回、Y・S（ワイズ）マーケットということで、大盛況でまる2年経つんですけど。この場所は窯の広場では収容しきれないので、1,000台ぐらい停められる駐車場で、駐車場も満員になってしまっています。これは、ママたちの子育て支援というけれど、私たちが何かしてあげるのではなく、一人で子育てをしているので、そういうママが「集まらない！」というようなことをやっています。そこでつながってもらえたいということ。ママたちは今はママだけど、それまでは何かしらされていたわけで、されていたことを活かして、手作りが得意な人は出すし・・・、お菓子作り、アロマ、マッサージなど職業でやっていた人はそこで・・・。私は何もできないけど見たいなという人はお客さんで、ということをやっています。

Y・S（ワイズ）というのはカラオケレストランで、そこが会場ですが、会場費はいっさい払っていない。たまたま私が野菜を出張販売で当番がない時に行って、ワイズは名古屋にある不動産屋さんで経営してい

るんですが、その部長さんの奥さんが野菜を買いに来て、名刺として段ボールに書いて渡したら電話がかかってきて。それでワイズさんに行って、部長さんに「なぜこういうことを始めたか」という話をしたら共感してくれて。「そんなことなら第一の窯の広場としてここを使って下さい」と言われた。とにかく不思議にも、この従業員のモチベーションアップにもつながるからということ、従業員がチラシを配って。そんな関係で、単なる場所貸しでなく、出店者は今200人300人ということで、ローテーションを組むような形で。出店者の中に事務局を置きましたので、私にはよくわからない状況ですが。そこで出店者を管理しています。せっかくなので今年度の目標は、出店してくれる人たちと、私たち主催者と、貸してくれるところと、従業員さんも含めて交流会を持つということ。平たくいえば、飲み会をやるうという話です。目的は「交流してつながっていくよ」ということなので、月に1回出店して販売して終りでは意味がないという話です。

野菜市・・・万博が終わってさみしいとみんなが言っていたので。地元の交流がないよという話で、地元の南山大学や名古屋学院大学の留学生を中心に、深川神社の境内で。そのことがきっかけとなって、そのときの実行委員会・・・、私たちのやりかたは常に実行委員会を作ります。なぜかというとMtOMだけできないから、ということでした。

そのあと、外国人の交流といっても、「なかなか外国人が来ないね」ということで、考えてみれば日本へは働

きに来ていて、日本の文化を学びに来ているわけではないので。「じゃあ何が必要か?」といったら、健康不安かな? チェック。ブラジル人が来ている教会に行ってアンケートを取ったところ、必要だと思ってやろうとしたんですが・・・M t t o M には医者がいないのでやれない。地元の開業医や医師会にも相談に行ったのですが、剣もほろろ。医師会は、「会議の場はありませんか?」と聞いたら「あります」、「そういうことを相談していただきたいのですが」と言ったら「そういうための会議ではありません」と言われて。ということ、ダメなことがわかって。ではどうしようかと思って、たまたまコープあいちのフォーラムで南医療生協とつながっていたので、思い出して電話して、理事会にかけていただいて、うまくできる運びとなって。これ5年目が過ぎたところですよ。3年目くらいから、地元の日本人住民と同じ地域にくらす外国人に問題があるということだったので、もう少し仲良くなるのもうまうまくかかなと思って始めた事業です・・・私たちがそこに住んでいない人が、そこに出かけて行った2年間。やはりそこに暮らしている人が外国人とやってもらわなければダメなので、3年目から自治会主体になったんです。自治会に「やりませんか」と声をかけて、連合自治会が「やりましょう」と。養成講座を受けていただいて、血圧の測定の仕事や尿のチェックの仕事を覚えてもらうんです、住民に。そして当日は地元の人がやる、南医療生協が中心になって。5年目に入って、個人的な参加で愛知医大の先生や愛知教育大学の先生とか愛知国際大学の先生が、ボランティアで参加してくれましたし、国際関係の問題を専門としている弁護士や、行政書士の先生たちも毎年来られ

るようになりました。あと、瀬戸市の消防署が近いということ。なぜかという、県営の住宅に住んでいます。火災報知機はついているけど意味がわからず、ヒヤーンってなってもそのまま使いつける、そつする強制退去させられるんです。それはあまりにもかわいそうだからということ。まずこういう音が鳴ったらこういう原因ということを知りたい、せつかく通訳がそろっているから。

まだまだいっぱい課題はあるんですけど・・・。

この時はコープあいちの人にも参加してもらって、共同購入の車で回ってもらって・・・。当日通訳に入ってもらい録音して、「何時から」にやっています」ということをポルトガル語、スペイン語、中国語、いろんな言葉を入れたのを、トラックに積み込んで流してもらった。それで、この間もフィリピンの男性が入ってきたので、「どうして知ったのですか?」と聞いたら「コープの車」と言っていました。

今年はどうして協同でということとで交流会・・・実行委員会にもこんなような形で、スタッフ含めて100名くらい・・・。

これは去年から始まった「職人参道まつり」、私たちが提案して始まったんです。瀬戸800周年なんです。陶磁器の・・・中日新聞に大きく。記念事業をやるということとで、商工会といろいろ話合って決めたことが、銅像を作るつという話だったので・・・そうじゃないかということを批判していてもしょうがないのでならばということ。何年前泉芸の先生に、「陶器の産地は全国に何件もあるけど、土から釉薬から

食から食べることから、すべてがそろっているところは瀬戸よ」という話を聞いていたので。木箱屋さん、釉薬屋さん、土屋さん、型を作る原型師さん・・・なんと去年がきっかけになって独立したんです。本当は企業の原型師で働いていらしたんですけど、これがきっかけで原型師塾。同じ職人が勉強し合う機会を作ろうということですね。それが始まって、今独立したという話。外に出ない仕事なんです。それを人前で見てもらったということとか、体験を面白おかしくやったりとか。すごい人が来たんです。大阪とか結構遠くから。かなりの経済効果を発揮したと思って、周囲の飲食関係は満員で行列でしたから。

去年は最初だからということ、瀬戸市の観光課に行って、「こういうことを考えているから、ちょっとジョイントさせて」ってお願いに行きました。単体でやると、広報するのにすごいエネルギーが必要だし、うまく伝わるかどうか分からないので、そこを省きたいと思って。もともとあった「アトリエさんどう」という行政の観光課が主催しているものにジョイントした形でやりました。「アトリエさんどう」というのは私たちがやって去年で3回目、でもほとんど人がいない。すぐ近くの参道でやっているのに、祭りがあつたのに気がつかないようなもので、行政としては「アトリエさんどう」をやめようかどうしようかという時だったので。私たちがジョイントするというのがきっかけで、ならばということ、銀座通りの私たちだけではなく、中央通りの商店街とか、川向うの末広商店街にも呼びかけをして。そこで実行委員会が開かれて、商工会とかも入って、それぞれがお金を出し合って、広告費を持ってたくさんチラシを作って・・・そういうよう

な相乗効果があって、すごい人でした。今年については、瀬戸市のほうから「アトリエさんどうはなくなるかもしれないが、職人参道は続けましょう」と言われて、それなら「お金下さいよ」という話で。といってもそんなに簡単にはいかないので、市民活動の助成金を申請して・・・このあいだ終わったところです。それ以外、毎月やっているのは「遊びの学校」。

この「遊びの学校」は、瀬戸市が発行している店舗配布のチラシになぜか最初から載るようになって、全戸配布されるようになった。月1回の寄り合いです。第1土曜日6時半からやっています。一人1、300円食べ放題で、お酒はぶら下げてきてね。なぜかというと、ママたちから発信されたんですけど、月に1回くらいはみんなでぐちゃぐちゃしゃべったりしながらワイワイと。ですから、2歳から70代後半までこんな感じです。南医療生協のみなさんも最近ちょっと・・・。

いろいろつなぐことを目的としてつないできたなあ、というようなことを実感しています。つないだ結果、暮らし安い地域づくりということをやってきたつもりです。その先に、今、協同組合が思っている・・・。こんなことから7周年ということに気がついて。8年目を迎えるにあたって、建てるべきを含めると9年前とは変わってきて、70代半ば過ぎた人も出てきたので、どうにかなるよというような関係を築きたいと思って。そうなるかと南医療生協とつながったことで、医療とつながればこれでOKじゃないかと思っていて、コープあいちともつながっているし。

今、南医療生協の支部づくりを始めました。南医療生協の病院が近くないので、あのパンフレットを見せても「何で?」という話になって、それをいちいち言葉で説明していただくんですけど。説明できる人をたくさん増やさなきゃということで、勝手に作ったのがこれです。もちろん勝手に南医療生協のパンフを作るわけはいかないので、理事会に承認してもらわなければいけないんですけど。パンフレットというよりはチラシです。なるべくシンプルにまとめたいつもりです。実は何回も作りなおしているんです。苦労していないように見えて実は苦労しています。一つ一つ言葉を考えるにも、弓矢さんと一緒に二人で、がらっと作りなおしたりして。最初、南医療生協を出したんだけど、いやいやそうじゃないと思って。めざすことはこういうことだろうということから、最終的に「組合員になってね」ということでこうしました。これは中身が医療生協となっていますけれど、中身をコープあいちにすれば使えるんじゃないでしょうか。結局こういうことじゃないですか。一人ぼっちのいないまちをめざしてということです。

昨日、熱を出して。夫がいるから大丈夫なんですけど。寝ていると来るんです、お粥を作って。夫がいるから大丈夫なんですけど。部屋まで入ってきて、「悦子さん、どう?」私の台所でいろいろ…。そういうことだと思っんです。なかなか隣近所って抵抗があるって聞くんです、近すぎて。隣近所が抵抗がある、そこから逃げ出すことができないし。

協同組合というのは、そういう意味ではちょっと楽な部分があって、でもここに関わる協同組合の意味って

いうのか、価値については共有しているもので、そこでの仲間意識で支え合えるといいなと思っていて。だから、「一人になっても障がいをもってでもできるだけお金をかけずに終わりの時まで支え合う、そんな関係があるとなにより安心。」「お金をかけずに」というところが結構重要だと思っていて、お金がいらなからしいということではなく、そういう関係があればいい暮らしをすると思っんです。たいがいの生活というのは専門家が関わる部分ではなく、一般の人たちが支える仕組みがあれば、普通に自分の家で死ねるんじゃないかなって。それには協同組合が。先ほど向井さんが協同組合と付き合うには、関わるにはどんな課題があるのかとおっしゃいましたが、私は課題があると考えていなかったから、ダメもとで始まったんですが……。もし課題があるとしたら、やはり当然のことながら理事会に承認していただかなければいけないことなので、時間がかかるかな。みんなの組織なので、一緒にやろうと動き出すまでには時間がかかるので、そこが課題だと思います。

●仲田：窯の広場へは何回も行ったんですが、名前の由来を……。

●服部：Mはマインド、t oはつなぐという意味。みんなは窯の広場にしたらい。今話しているのは、地域にはいろんな団体があります。そういう人たちとコープあいち、南医療生協と一緒に事業しようよって。今、私たちができることとできないことをそれぞれが持ち寄って。世の中暮らしにくいですよ。その「にくい」部分を持ち寄って、安くするために何かできないだろうか、という話し合

いの場を持っています。そんなことがきっかけで、十一月十六日に瀬戸市福祉課が主催する自立支援協議会があって、障がい福祉に関わるNPO法人や社会福祉法人や企業やいろんな人たちが集まる会議らしいです。会議の後に懇親会があって、今度の場所が窯の広場になったことで、向井さん、コープあいちや南医療生協の参加もOKということで、そこは自治会の人たちもいるので、具体的な話がしやすいかな、「いいよやってる」と認めるところですよ。

●仲田：ありがとうございます。次は前田さん、お願いします。

●前田：今日は協同組合のはなしなんですけれど、なぜ多摩市なのかということと、なぜ生協になったのかということも簡単に含めながら発表します。僕が修士課程の学生だった頃、6、7年前に多摩市で調査していた頃のことなので、かなり古い話ですけど、今にも通じることがあると思うんです。多摩市の団地は30年くらい経っていて、その1階はNPOなどの市民活動が利用している形になっています。7年くらい前、地域活動といってもよくわからなくて、「いったいこれは何なんだろうっ？」という感じで、一つ一つ話を聞きに行って、まさに服部さんのようなお話があって。でも最初は地域の活動ですよって言われるんですけども、地域の活動って言われてもこれ一体何だろうっ？って。うまく捉えられなかったのをまとめたような

ものになります。

なぜNPOに入ったかという点、大学生の時に阪神淡路大震災があって、すごくNPOが増えてきたと言われた時期だったんです。ただ、NPOやボランティア団体とか市民活動って数で捉えるのが難しく、定義もいろいろで、いろんなデータを使ってみたんですけども……。

これはボランティア団体数の推移で、社会福祉協議会がまとめているものなので断片的ではありますが、やはり増えているということができて……。一方で98年に法律ができて、NPO法人格ということ、今4万団体ができてきている。違う見方をしても、こういった活動は増えているんだということが、数字からもなんとなく捉えられるのかなと思いました。

なぜ多摩市なのか？ということについても少し丁寧に見ていくと、NPOといってもNGOのように国際的に活動するものから、ほんとに地域に根差して活動するものまで様々なものがあるんですけど、内閣府が出している統計をすごくざっくりのを見てみると、予算が100万未満が3分の2。ということかという点、海外だと様子が違って、かなりボランティアに依存しているのではないかな。依存という言葉は必ずしも適切ではないですが、地域の人たちが担っている部分が多いのではないかな。海外のように本当に何百万と給料をもらって働くという形態よりも、どっちかという点ですごく地域に根差してやっているのではないかな、というような想像をしていました。

今日のこの話とはどちらかというと支援という話のほうが適切になると思いますが、地域といってもいろんな結びつきがあって、それを見ていく時に、隣近所の地縁と志縁、あるいは選択縁と分けて見てみると、一つの手がかりになるんじゃないか・・・ということが僕が大学生の頃に授業で言われていたんですね。地域の結びつきというのは、地縁だけではなく市民活動や選択縁とか志縁あるいは血縁とか結びつきの縁とか・・・いろいろあるんですよ、というようなことを頭の中に入れて、多摩市のことを調べていました。

なぜ多摩市なのか？と言いますと、多摩市はここにあるんです。なかなかデータがないので、NPO法人の事務所（2006年）地図上におとしてみたんです。1都4県ですけど。そうすると都心部に多いということがなんとなく想像がついて、全国的に活動する団体だったり、あるいは世界的に活動する団体って利便性から23区に置くんですけど。この23区をちょっと取り除いて見てみると、実は多摩市が最も多かったんですね。人口あたりにすると、多摩市が1万人あたり5、小金井、武蔵野、鎌倉は神奈川県、国立、狛江、立川・・・、西東京ってデータにおとしてみると、この東京の西部は人口あたりの数が多い。こちら辺はべつに働いている人が多いわけではなく、ベッドタウンなので、何でここが多いんだろうかと疑問に思っています。多摩市は最も飛びぬけていたので行ったら、多摩市の人は自負を持っていて。当時は西の神戸東の多摩って話もあったくらい、多摩市は有名なところでした。その中で多摩市に注目しまして・・・、多摩市ってどういう所かというところ、春日井にすごく近くて、大きく区画整理されているんですが、南半分は多摩二

ユータウンになります。北半分は、「平成狸合戦ぽんぽこ」だとか「耳をすませば」、シブリの映画の舞台がここになっているので、うまく団地の様子だとかうまく描かれているのかなと思っんですが。ただ何で多いだろう？というのを解き明かすために手段をもっていなかったもので、とりあえず75団体全部にあったんですけど。電話やメールをして「話を聞かせてもらえませんか」と言ったらうちで、「いいですよ」と言ってくれた30団体に話を聞いてきました。今日はその結果になるんですけども。

そうするとどうい活動があるかというところ、さっき見たように、団地の中の1階の商店街を使って障がい者の就労の場を提供しているんです。(あきたや)これは中古品を扱っているお店。実はお店という形ではなくて、重度の障がい者の預かりをしているんです。でもそれだとURが貸せない、そういう場としては。私たちとして名目上は中古品を扱うお店、裏側では重度の障がい者を預かるという工夫をやっていている活動です。これは高齢者のサロン活動をしているんですけど、こういうのはすごく多い。

この人たち、いったいどういうところからできてきているんだろう？町内会とはちょっと違うんじゃないかという疑問をたててみたら・・・。当時は全然わからなかったんです。任意の勉強会からできましたって言うんですが、なんで地域で勉強会をしているんだろう？と思ったんです。正にこういう場なんです。こういうのがあって、それがまだ23歳で想像がつかなかったんですけれど、「任意の勉強会が始まったんだよ」とか、あとは、すごくよく出てきたのは生協活動。ここで生協と僕の研究が結び付いたんですけど。「もともと班で

一緒だったの」とか。それは生協が目指しているものではないと思うんですが、副産物のようなものだと思うんです。生協を通じて出会いがある。ある程度価値観を共有しているんで、すっと行動に移しやすいということがたぶんあると思います。イベントでたまたま隣に座ったとか、ヘルパーの研修会、連合のPTAの活動。あとは別の活動で知り合ったというんですが。

これがさっき言われたことに近いんですが、これが僕の印象に残った言葉で、「どついう人たちでできているんですか?」と言ったら、全員がそうというわけではないんだけど、「向いの隣人より遠くの隣人」って。なんかすごく言えて妙な言葉を言うなあと思って。遠くの隣人なんですね。同じ棟の人、お隣さんとかこれはもちろんちょっとアシテーションしていますが、仲良くはしたくないんだけど、違う地域や違うところの人とは仲良くしたい特性があるんだよね、私たちのつながりは。これは多摩市だから横浜の人と一緒にやっていますよ、とか言うわけではなくて、多摩市ぐらいの広がりではやりやすい。歩いてだとか自転車とかで行ける。だけど隣の人というわけではないんだよ。それをもう少し他の人に聞いてみると、やっぱり、「今日は活動行きたくないなあという時がある」。高齢者で、ボランティアで障がい者の預かりをしているとちょっとしんどいなんていう時もある。今日はサボろうという時に、スーパーで顔を会わしてしまうような関係だと、「昨日いたよね」と言われてしまう。「それだとちょっと負担」な感じがって言われたんです。「あーそういうことか、そういうつながりっていう面もあるんだ」と思いました。

一方で逆もあります。高齢者のサロン活動を受託しているNPOもあります。それも生協関係だったんですけど、多摩市から事業を受託していた。そのとき多摩市を分割するにしていたんですね。そこに住んでいる人が来るように、っていうふうに設定して。小学校の空き教室を使ってやっていたんですが、そのあと、「来づらい」っていうんですね、高齢者の人が。なんでかっていうと、同じブロックで分けてしまうと「私の住んでいるところがわかってしまう」、「特にここは団地が多いんで」、「あなたは市営住宅の人ですね」、「あなたは分譲賃貸」っていうのが、住所を言っただけでわかってしまう。それだとちょっと落ち着かないというので結果的にそれを取っ払って、どこでもいいですよっていったら、横浜の方に通つかといたらそういうわけではなくて、この地域のこの辺で、この住所がどういふところかわからないというぐらいの関係というのが・・・。地域っていういろんな地域があるんだ。町内会みたいな地域から、こういうのも地域って感じているんだ。こういうのも発見です。

もう一つは、高齢者だけでなく、精神障がいの場合は見たい目は普通とあるので、制度的にも隣の地域から施設に通うことに補助を出すことを認めていたり・・・。子どものフリースクールも三鷹市の事例ですけど、あまりにも近すぎると、「あのこ不登校なのね」って近所でうわさが立ってしまうから、ちょっと隣のところに通うって・・・。これでプリントを得て、うまくまとめられなかったんですけど・・・そのときの縁として地縁だけではなくて生協とかこういう縁があると、地元の中に町内会とは違う役割があって、大事だと思う

んですけど。ちょっと苦しいだとか、ちょっともう少しというときの結びつきっていうか、団体を作るときにエネルギーや支えになっていないかなあ。また生協だけというとそれも苦しくなってしまうので、おそらく生協だけではなくいろんな……。ただ、生協が大きいのは、組織としては大きいんです、この地域にもある。まあそういうことが発見です。

300団体のうち多摩市の中では、6団体が当時生協が関連していたんです。これが資料に、No.5とNo.7、No.10もそうです。・・・は完全に生協が、生活クラブ生協がワーカーズコレクティブの活動と関連しているで、かなり生協の力が入っているんです。No.1は全然生協の組織には関係がなくて、生協の縁をもとに立ちあげた介護事業なんです。なので介護保険の枠外のことやっていますし、もう少し地域に根差したこともやっているんですけど。No.1みたいな活動っていうのは生活クラブ生協の目的の副産物、結びつきを作っていたってことが、これに結びついていて僕も捉えていたんです。これがNo.6。・・・。もう一つ強いのは、この中でマイコープも入っているんですが、やはり組合員どうして顔をなんとなく知っているの、6団体はお互いやりとりしているんですね。福祉活動するときに母体となっている結びつきが同じなので、多摩市の中で結構やりとりができていて、という面も発見です。ただ、じゃあこれですごくうまくいっているのかという実はそうじゃないところもあって。・・・。

これはけっこう古いんですが、こういういった商店街の中にNPOだけではなくて福祉事業も含めて、商店街は

大分色が変わってきています、多摩市の場合は。高蔵寺もそれに近くなってきていると思うんですが、緑区へ行くと鳴海の方の団地もそうなっています。NPOとかも入っているんで……。

当時、もう少し話を聞いてみると、「これ、200年30年続く活動なのかな?」って疑問に思ったんですね。当時僕が調べた時は、NPOが非常に注目された時期でもありまして。増えているって言われていたんですが、聞いてみるとやはり「主人が働いているから生活が成り立っていくので、私は収入がなくてもやってるわけなんですよ。」そういう人たちが成り立っている。だから今後どうするの?って話が出てきたんですね。やはりこの人も40代で「ここで働いているんですけど、」月曜から金曜まで毎日この事務所に出てきてええっ?それしかお金ももらってないの?みたいな世界なんです。そういうのってやっぱり自分の代はいいんだけれど、次の若い人にバトンタッチできていかれないし、NPO全体のことを考えると存続が危ぶまれる……」この人は40代の女性で、実際にここで働いているんですね。でも「自分はいいけどほんとに続くのかな?って言うと不安もあるね」って話も聞かれました。

そうした中で、多摩市がなんで多いのかっていうと、実は東京の都市構造とはうらはらで、これも少しいやらしい話になってしまっていますが……。実は多摩市、東京の西部って、東京の都市圏っていう構造でみると、豊かな地域なんです。補助金という意味でも、市の財政もしっかりしているんです。武蔵野市も三鷹市も多摩市も。活動を支えるお金という面ではかなりしっかりしている、という面が見えてしまったの

で、これからどう考えていけばいいのかな？っていうのが……これからいろいろ展開していったんですが……。じゃあこの時の状況とは違ってまずいかというところではなくて。日本全体的としてできていっているの、これをどう捉えていくかが、ぼくの今後の課題かなと思いました。

それで最後に、協同組合がどういう役割かというのを、今までの話のまとめとしては。地域の活動を支えるいろんな結びつきがあって、その中に協同組合があるっていう話をしたんですが、もっと積極的に生協や協同組合の役割は何かといったら、これイギリスのオックスハムとセイブ・ザ・チルドレン、世界的に災害があつたら救援活動、今回日本にも来ましたが……。インドネシア、アチエの時も、家を建てて支援していましたけど。世界的に有名なNPOだということはなんとなく知っていましたが、行ったらお店がものすごく多いんですね、町の中に。何かと思ったら古本屋だったり、すごくいい洋服を売っている。でも全部中古なんです。日本だとこれ大学なんで、教科書を買っているんですね、日本だとブックオフになってしまっている。ではなくて、こういうNPOがこういったことをすることで、その売上げが実は途上国の支援にまわっている。うまいな。ちゃんとしたものを売っているんで、まちの中につまぐ溶け込んでいる。ふと思うと、生協ってものを扱っているんですね。いろんな勉強会とか、いろんな市民活動だとかもあります。生協はものを扱っている。全部の生協ではありませんが、コープあいちも店舗を持っている。ただ関心だけで集まるだけでなく、ものを買ったか売るといふ行為を通じてもポテンシャルとして入口として

ある。やはり、話を聞いてる中でも、生活クラブ生協で活動している人たちは、80年代90年代に多摩二
ユータウンにみんな一緒に入ってきているんですけど、当時は食品添加物の関心で始めているんですね。そ
の人たちはね。僕も東京の郊外で育っていて、小学校に入るまでは生協だったんですけど、僕の親はコーラ
とマクドナルドはダメって、生協のポテトチップスだったら食べてもいいとか、だったんですけど・・・。
当時の関心の中で、ものを買っということでの結びつきだったんだと思うんですね。そういうポテンシャ
ルを生協は持っているのになって、漠然と思っただけ。ただみなさんと違って実践しているわけではない
ので、言えることはここまでなんですけど。まあそういうことを考えながらも一度まとめなおしてみま
した。ありがとうございます。

●仲田：選択縁は、上野千鶴子さんが84年にこの概念ができています。生活協同組合もその視点で見ると選
択縁に間違いなく入りますね。ありがとうございます。

●土屋：今3つの報告をうかがって、自分のところだったらどうだろうという視点で学ばせていただきまし
た。3つ目の報告の中で、担い手のかたについての話があったのですが、まさにうちもそれで、いろんなボ
ランティアが手弁当でやっていたいてるんですね。岡崎から毎日のように、大高までJRに乗ってボラ
ンティアにみえている組合員さんもいます、定期を買われて。一銭も医療生協からは出ませんので、全部手

弁当でやっていただいているんですけども、活動に魅力があるからそういうことができるのかなと思います。そういう点では協同組合の中に参加してみたいという強い思いを抱いていただけのような中身、生きがいつくりが大事ななと思いました。そういったことがまだまだ広がっていきけるのが今の時代かな、というところで報告させていただきたいんですけど。

これは、9月8日の支部職場交流会、地域の組合員と職員が交流を行いました。そこで使いました資料になります。一枚目はこの10年間のところで、組合員が自分自身で動くようになってきたのがこの20年くらいだと思っんです。その中で、事業所の経営というのが赤字から黒字に変わってきたということがあるんです。すごいところが、組合員の取り組みが大きく広がってきているところと載っているので、見ていただければと思います。そのあとで「協同っていいかも」という書籍が去年出て、「だんらんにつぼん」という映画ができました。これが国際協同組合年の認定事業に位置付けられて、それを見られた方の感想が載っています。二枚目に名南ブロックで実際にあった事例、三つの事例が入っています。

1点目が、一人暮らしを続けてきた方が一人暮らしのさみしさに困って、わいわい長屋（多世代入居住宅）へ「今日から住まわせてくれ」と駆けこんできた。運営委員さんをされていて、生協はいざという時に頼れるから今日からここに入りたいということで見えました。

2例目、3例目は厳しい事例なんですが、2例目、60代の一人暮らしの男性のかたで、組合員さんでなか

ったんですね。しばらく顔を見ていなかったことを不安に思っ、町内のかたが警察と一緒に自宅を訪問したところ、自宅で倒れていたところを発見され南生協病院へ搬送され命は助かった。だけでも何度訪問しても、医療生協へは加入しないと断り続けられた。

3例目もそれに近いんですが、50代です、この方は男性の一人暮らしで、数年前に同居していた母親を見送った。この方も組合員ではなかったんです。回覧板がポストに入りっぱなしになっているのを不審に思って警察とともに訪問し、自宅で亡くなっていたところを発見された。死後10日ほど経っていた。母親がみえた時から加入のお誘いをしてきた。他の病院に受診しているので断られ続けていた。

1点目、2点目、3点目、何が違って、何が共通しているのか。50代から60代の男性の一人暮らしが増えていく。うちの運営委員さんも積極的に関わっていただけではなくて、まわりからのおせっかいにおれて組合員さんになっていただいた方。②、③の方たちは50代60代の男性一人暮らしで、地域への関わりが特に薄かった方で、何度も地域訪問をしてきているんですよ、組合員さんは。でも加入はしないと断られ続けていた。

もし南医療の組合員さんになっていただいたら、どんなことができたかなというのは・・・名南ブロックであれば、原水禁世界大会の「健康の友」の配布ルート、新聞があるんですが機関紙。これは全部送付してなくて、地域に配布ルートを持っていて、これも無償で組合員さんが一軒一軒のお宅に顔を見ながら配

っていくということ、そういう中から声がかかったんではないか。事業所の利用だけであつたら、そこでストップしてしまって、その方とのつながりはなくなってしまふ。もうひと押しして加入していただいたら違う結果もあつたかもしれないが、という反省の意味も込めて出しました。まだまだ地域にはたくさんの方がある。一回二回断られても、それにめげることなくお誘いに行く。先ほど選択縁のお話が出ているんですけど、協同組合である以上入らないはその人の自由というのはあるけれど、入りたいと思つていただけるような中身を持っている事が大事な。今、月間中で、これを全職員、組合員さんに発信しながら、断られても地域へ入っていくことは大事だねということ、地域訪問を進めています。

最後に支えあいシートを載せておきました。これは南医療生協は四つの良い医療の視点を持っています。一つ目は社会的信頼を保つ。二つ目は不必要な医療は行わない。三つ目は本人の納得と同意。四つ目として地域に支えあい、助け合いのネットワークがある、というのを掲げています。

四つ目の視点は、この時代とても大事になってくるのかなと。入院されている患者様が地域に帰っていく。退院されて、その地域にどんなつながりがあるのか、そのつながりに入っているようなそういったものがあつたらいいね、ということ、支えあいシートを出しました。これは大高地域であつた話ですけど、ケアマネから上がってきている、アルツハイマーで認知症がある方で、事情があつて一人暮らしをされている方。デイサービスに週3回、ヘルパーも入っているんだけど。それ以外で、地域の組合員さんで見守りしてい

ただきたいという依頼を受けて、実際にその方の住んでいる地域の支部長さんに早速訪問いただいて、私もついて行ったんですが……。私は1回しか行っていませんが、この支部長さんは4回くらい訪問いただいて、どうだったということを確認いただいています。こういったのが夏以降20件くらいあります……。地域でつながりを作っていくことを取り組んでいます。

いろいろな年齢の方が地域にはいらっしやいます。自分のところだけではできないということとかがありますので。たとえば、南学区という地域では、地元町内会と一緒につながっていくということに取り組んでいます。ですので、町内会議にも出席させていただいて、町内会の取り組みも一緒にできるような関係ができてきたのかなと。そこで町内会長さんが言われたんですが、協同組合は企業と違って利益を追求だけにあるのではないんだと、私たちと一緒に自分が暮らしている地域を作っていくパートナーだと、町内のメンバーに発信していただいているところがすごいと思います。

●仲田：4人の方の報告、もっと聞きたいような、すごい中身が濃いですね。
さっき服部さんが瀬戸で支部づくりの話がありましたけど、商品利用だけが生協への加入する目的じゃないと思います。

――5分休憩――

●仲田：4人のお話でいろいろ感じられたこと、地域での協同組合との関わり……。フリーに意見交流を
していきたいと思しますので、その前に質問があれば。

●椋木：土屋さんのお話の中で、町内会長さんが協同組合がどういう組織なのか説明されたということですが、その町内会長さんは組合員さん、あるいは奥さんが活動家なのでしょうか。

↓土屋：ここにも来て発言されています。小池田さんです。昨日も会議でいっしょでした。
それを聞かれた他の会長さんも同じ思いでやっていたところがあります。

●伊藤：河田さんのお話の中にも地域町内会との結びつき、町内会がこういうことに関して一緒にな
れるかという、なかなか難しい。服部さんのところは町内会や地域の人たちとの関わり合い、服部さん
がめざした始めの頃からだいたい経つので、すごく発展していてビックリするんですが。先ほどの土屋さんのお
話で、自治会長さんが協同組合に理解のある方で、みなさんに協同組合の説明をしてください。ただそれは
どこにいてもあるものではないので。私たちの地域でも、協同組合、組合員が活動するとかということば
にアレルギーがあって……。全部NOというところもありますね。

最近私の周りで思うのは、民生委員との関わり合い。地域の高齢者家族や独居のデータは民生員が持っている、行政はそこへ丸投げされている。どれほどお手当があるかはわからないが、半分ボランティアな気持ちでやってくたさる方と、私は民生員だというバッチ的で、地域と全然つながっていらっしやらない方がいる。そんな中で、南医療生協のようにボランティアな活動会員のほうが、無報酬でいらっしやるといって、そういうのがそれぞれの地域でいないという・・・。

だから、私たちは地域で困っている隣人たちをどう支えたらいいかっていうのが、すごい課題なんです。私はくらしすけあいの会のメンバーで、今日も午前中からバタバタしたんです。80歳の独居の方で骨折して、支えて下さる方がいないような状況のなか、まだ面談してないのでわかりませんが、やはり生協の組織の人たちがそういう人たちと関わることの難しさというのを、それはどこにでもある問題だろうと思うので・・・。河田さんも地域とのつながりかたが大変。服部さんはうまくやっというらっしやる。前田さんは調べてみたら、多摩ニュータウンは来り人みたいな方たちの組織ですよ。来り人とそこに永永と住んでいる歴史のある人たちとのつながり方に問題点が・・・、ひょっとしたら多摩は少ないかもしれない。南医療生協の話聞いていますと、民生員に任せっきりになっているところとのつながり方が不思議に思えるので、そんなこともみなさんに聞いてみたいと思います。

●仲田：今の地縁組織の地域共同体と、さっきの選択縁、支援組織、いろんな現れ方があって思っんですが、河田さん何かありますか？

●河田：やはり午前中も、社会福祉協議会の地域福祉計画をどう進めるかという振り返りがあったんですが。地域福祉を担ってきた社協や地域組織・・・、その中でも民生委員さんは相当努力されていますよね。65歳以上をきちっと訪問していただくとか、あれもこれも行政からごんごん・・・。だから民生委員さんももっとほしいんだけど全くできないというふうなことがあって。この地域の民生委員さんも、この新しい支え合い事業やりませんかと言ったら、とてもじゃないけどそんな時間はないということ、なかなか・・・。地域によって相当住民のみなさんの意識は違うんですね。この地域、千種区っていうのは、名古屋市中でも結構レベルの高い方々がお住まいのところなので、民生委員さんの訪問はあんまり歓迎されない。だから受け持ちのほとんどのところが、来ないでくれという方が多いということを聞いています。だからなかなか支えあって行きましようというって、そんなものはいらんという地域もあるんだということを、まず頭に入れておきたい。東日本大震災で、地域の中で付き合ったり、支え合ったり、分ちあったりというような姿が映像で映しだされて、日本は素晴らしいところだとか・・・。でもまあ、そういう中で支え合ったり分ち合うような社会を今後作っていくという点でいうと、今の日本の状況を見ると、とてもじゃないけど国とし

てそんな方向を向いていない現実がある。だから一つは、そういう国の大きな方向をどうしたらいいのかという問題と、そこにあんまり期待していてもしょうがないから、もっと地域でいろんな人たちが参加してやっていこうじゃないかという、それぞれがあると思います。だからそういう点では地域いろいろあるんだけど、これから生協の役割として一つ思うのは、日常的にいろんな相談を受けているという中で、組合員のみなさんもいろんな困りごとがあって、自分一人では生活が成り立たない、助けてほしいという声があって、生協では何もできないので生協はつなぐということですね。地域のいろんな団体につないでいくということですね。そういうことを日常的にしております。だからつなぎ先をどれだけ作っていけるかということでは、生協はこれからいろんな方々と交流してつなげないなと思うことと、生協の組合員の参加を増やしていかなければいけないということ。コープあいちになりましたけれど、愛知県全体でいうとまだ20%もいっていませんよ。

先週も岩手県に行きまして、なぜ行ったかというと、生活相談、生活資金の貸付の事業を、生協として取り組んでいこうじゃないかという研究セミナーがあったんです。日本でいうと、岩手の信用生協と九州のグリーンコープと東京の生活サポート基金の3つしかない。多重債務は最近少なくなってきたんですが、一番多いのは生活できないという、収入がどんどん減ってきたりして、そこをどう手助けするかということと、銀行からもなかなか貸してもらえないんですね。そこを生協としてきちっとやっていこうじゃないかという

研究会。今度、みやぎ生協はそれを取り組むということをやっています。みやぎ生協は県民の7割組織しているんです。その中からいのできてくるところにもありますので、一つはいろいろありますけど、協同を進める生協をもっと広めて知っていただくことが、進める上では大切だなあと思っています。ここもめいさん生協の発祥の地域なんですけれども、組合員との関係はいいですけども、地域住民みなさんとの関係では、生協はなかなか・・・。組合員では利用するということだけしかなかったので、そこを変えていかなければいけないというのを、この一年取り組んでいく感じでした。

●仲田：服部さんつながることを目的にするということですけど、つながりに違いがあるんですね。協同組合とは。

●服部：とにかく、いろんなことをやっていくということかしら。それを見ていて、つながっていく。最初は商店街、商店街には結構やっかいになって、毎回。本当にやっかいな所だったようです。商店街はやっかいかもしれないけど、ここにある立地、向えと隣、みんな難しい人だった、とっても。その商店街の中でもうまくいかない人たちに囲まれていたということが、後からわかったんです。今は空き店舗はなくて、空き店舗は貸さない。住まいになっていたり、相続人の問題があったり・・・。

でも何をしたいのかがよくわからないと言われていて。最初はコーヒーがあそこはちょっと安いんじゃないかとか……。私たちはいろんなことをやってきているので、いろんな人が現れて人通りが良くなったんでしょうか。そんなことで認めてもらえたのか、とても良好な関係なんです、お向えと横も。

先ほど副産物とおっしゃいましたが、前田さんが。私、このパンフレットを作ってから考えると、本来はこれが副産物ではなくて、それが主なんじゃないかなって。協同組合として本来それが主であって、道具として事業があったり医療があったりしているだけのことで、決して副産物じゃないんじゃないかと思う。むしろ、副産物じゃないところをもっと前面に出していかないと、企業に間違われる。これがあって道具としてはこういうことをやっているんだよということであれば、そんなこと言われなと思うんです。もしかしたら、窯の広場はそういう意味で、お金儲けはしていますが企業とは誰も見てくれないです。事業と違ってないんです。それは副産物のところが前面に現れていると思うし、だからどんな所にも来てくださいと言われる。一般の商店だと思われれば、ちょっと違うでしょうという話になると思うんですが。たぶん、今ちょっと思ったんですが、本当かどうかは知らないけど、そうかなって思うんです。副産物じゃないよというところを気がつかないといけない。

●伊藤：上手です。毎年改築していて、改築する費用を捻出できるところがすごい。

●服部：ボランティアでやるから材料費だけで済むんです。大分おしゃれな感じになりました。

事業をしていくとどうしてもどんどんでかくなってきて、それが主になってきちゃうけど。本来はこれだったんじゃないでしょうか。もうちょっとそこに組合員自身が気づいて取り組み直すということ。そう思ったから、南医療生協のパンフレット配るのもな?と思って。勝手にパンフレット作っていいですかって、理事会通してもらって結構ですから。↓南医療生協のパンフレットでも事業っぽい?

病院が遠いから・・・理事会でそんな話が出るんです。地域に病院がないから事業所がないから・・・私たちはそこに期待しているというよりも・・・違う捉え方をしているので。それを説明するのにあのパンフレットだとどうしても。病院の写真が出てくると、遠いのは何でこんなところへ・・・という話になってしまうので。それはやっぱり、面倒くさかったので、勝手に、パンフレットと思ったんだけど。実はこんな小さなものになって、持ち帰りやすいサイズに、若い人に受けるサイズになりました。

●仲田：とてもいいと思いました。私も医療生協の運営委員になって、研修中なんですけど、事業所がないんです。その中で組合員活動がものすごく旺盛にやられている。来年280万の会員生協が東京でできるんじゃない。事業体としてはいいんですけど、南生協のような組合員活動、組合員の姿というのがどういふうに生協の中になっていくのかっていうのが、非常に大きな関心事としてあるんですけど。

窯の広場は地域おこしという視点から見た時に、さびれた瀬戸の商店街がどう変わったのかということころを

聞かせていただきたい。

↓服部：地域おこしとか商店街の活性化なんて、思っていなかったです。なんでそんなことのためにやらなければいけないか。そうじゃなくて、むしろ自分たちのためにやるんだよという思いだったので。商店街活性化やまちづくりっていうことは、実はあまり好きではなくて。まちづくりって、今の捉え方って、商工会とかが捉えるいわゆるまちづくりでしょ。「そうじゃないよね、私たちは」ってところがあるので、そういう言葉は使いたくなくて。でも建てたところはさら地だから、たぶん今でもさら地だと補助金がありませんし、もともと商店街の活性化事業、国の事業もなかったの。今は出店者に補助金があったりして、出店しやすい状況のようですが、いっさいお金はもらわずに自分たちで建てたのです。頼りにされるようになってきたかな。あと、県のえらいさんを市の職員がつれてくるというのを、今……。

市民団体とのつながりというと、私は新参者なんです。社協とは一切関わっていないし、ボランティアというこだわりもあまりピンときてないし……。だけど市民活動連絡会という組織ができてから、パーティ瀬戸が建って、その委託が始まって、指定管理でほかの団体がやっているんですけども……。そこには瀬戸市のボランティア団体とかNPOだとかいろんな人たちが集っている連絡会で、その副会長をしているんですけど辞めました、自主的に。いろんな風が入ったほうがいいので。でも考えてみたら、そもそも新参者の私が副会長っていうのはね、いかななものか。でもそういうつながりがあったり……。やはり何

年かかった実績があって、やり続けるっていう実績が……。最近はいろんな団体が窯の広場をたよりにしてくれているようになってる。

でもやっぱりお金を稼がないといけないと思っていて、それを継続させるには。もっと支払えるようになりたいと思っていて。それが今課題で、経営者の勉強会にも行っちゃったりして……。

●伊藤：今、ランチはどれくらい作っているの？

↓服部：30食位。あとコーヒー。でも、お祭りだとかは全然桁が違います。瀬戸ものまつりは2日間で100万くらい。かき氷がヒットしまして。そう意味ではみんな組合員でやっているから、食べるこの本質はみんな一緒で。なるべくいろんなものを使いたくないというのがあって。かき氷は、いやでしょ。ほんもののシロップ。あとは、設楽のこんにゃく。こんにゃく田楽がヒットで……。おからで作った……。いろんなところが主催するツアー、そこが窯の広場へお弁当の依頼があって100食とか作って届けた。

●伊藤：今実際に動いている人は何人くらい？

↓服部：会員は50人くらいですが、キッチンのメンバーは8人くらい。毎日交代で。

●仲田：先ほど服部さんが言われたNPOの継続性って、後継者の養成はちゃんとしている？

↓服部：年代はバランス良く、若い人たちも増えてきているのでいいんですが、じゃその人たちの働く場に

なっているかといえは全くそうではななくて、それが今課題ですね。もう少し稼ぎたい。もちろん当初よりは上がってはきてはいるんですが。引き継ぐためには、やはり理念だけではなくお金も。生活があるので、やっぱりお金が大事だと思っていて。私もそういう意味では夫がいるということをやっているけど、やはりそれはおかしいな思っていて。こういうことが本当に必要だというのなら、そこにはちゃんと支払われるような世の中になってほしいなあと思うし。お金を稼ぐということは別に変なことではなく大事なことだと思っているから・・・、そういう意識があまりにもないからということで。実は11月3日、瀬戸市のちょっとそこで、話をしてくれて言われているの。

最初、これを立ち上げる前に、ワーカーズというのをみんなで立ち上げていたんですね。ワーカーズを立ち上げようと思ったきっかけは、神奈川のワークコシに行ったんですね。そこで落ちたのは、サービスの提供者は行政か企業しかなかった。もう一つのサービスの提供者、自分たちが欲しいサービスを提供する側になってもいいんじゃないっていうのが第3セクターで、本来の。それがワーカーズで。その力、ボリュームが三分の一位になるとバランスがとれた形になるんじゃないか、けん制力を発揮して、と思ったから、私なりに意味を発見してワーカーズを立ち上げることにした。最初は協同組合の配達を引き受けたんです。そのことで変わった。私は食べるだけの消費者の組合員だったんですけど、事業に関わって責任を持つということは、解決しなくちゃいけないので責任を負いますよね。責任を負うということがいかに大事かということをお思

て、リスクを負うということの大事さ。それを引き受け、たくさん広げてきたんです。ワーカーズも事務局と事業部との話し合いの場を設けていく中で、もともとアルバイトとして働いていた女性や一組合員の人たちがワーカーズの事務局になり、自分たちで責任をしょって仕事をしていく中で、考える組合員になっていく。やっぱり運命共同体になっていくので、生協の利用と委託事業をどうしたらいいだろうかとか何のためにか、いろいろな話し合っていくわけです。対価が高ければ高いほどいいかということ、でも自分たちは消費者でも組合員でもある。必ず価格に転化されるから、パンの値段が上がると困るから、どこかで折り合いをつけるわけですよ。ということ自分で自律する、考える組合員になる。そして、地域に考える人を増やそうとバトンタッチをして、地域で窯の広場を立ち上げた。そういう意味ではまだまだですけど、若い人たちとながってそういう話を常にしているので、ちょっとずつ変わってきて、こんなママ講座ができてきたんじゃないかなあと。

これはママたちが作りたいと言ったので、実は体の栄養というのはおまけの部分で、頭の栄養のほうに気付いてほしくて講座を組立しました。頭の栄養編になっている「紙を・・・なっていますか?」の安い紙っていうのは、実はインドネシアの森林伐採から始まって設備投資をしないおかげで安い紙が入っているんだっていう・・・、おむつっていうのはポリマーが・・・いろんな電力とか石油の問題とか、地球の裏側とつながっているんだよ暮らしは、っていう話をなぞですけど。切り口をちょっと興味を引くようにしまし

た。・・・瀬戸市からお金をもらいました。

●仲田：先ほどの支援組織との関係で、多摩ももう50年経つので、いわゆる70年代の新興住宅地というイメージではなくなっていると思うんですね、高蔵寺もそうなんですけど。だから地縁組織という捉え方、振興地でも今変わってきていると思うんですけど、その辺は？

↓前田：同じことが繰り返されているのかなって感じるのは、東京に帰ると・・・。多摩ニュータウンって、70年代からそのまま続いて、同世代の人が多いのでうまくいったと評価する人がいる一方で、あれは失敗だった・・・。今小学校もほとんどつぶれて行って、団地は4階建てエレベーターもついてなくて階段が大変で。僕も車ないんで、調査は全部歩きまわって。歩くと、団地から団地までどれだけかかるんだというくらい大変なところなんですけれど。そういう意味では、高蔵寺はもう少しうまくできているんですけど。今度はタワーマンションが、今すぐはやっていない。同じように1000世帯単位でできる。たぶん同じような年代の人が入る。繰り返し、同じような問題が大阪であるんですが、地元の町内会との折り合いがつかないということがあって問題。

一方で考えなきゃいけないのは、地縁組織との関係でいうと、地縁組織がいいとか悪いとかいうのではなくて、町内会というのは、おそろしく、地縁のつながりがあったとしたら、戦間期に役割が増えてきて、民生委

員という制度ができたりいろんな活動が入ってきて。第二次世界大戦の時に行政から役割が降りてきて、それが、戦争が終わって一回廃止されて復活して行政からの役割がそのまま続いた。そのときの町内会の特徴は世帯単位加入なんです。それが高度経済成長の核家族化とうまくいったかもしないんですけど。

90年代くらいからデータを見てみると、4人世帯家族って実は90年代くらいまでずっと伸びて多かったのが、今、単独世帯と二人世帯が上位できている。そういった時に、地域の福祉とかつながり方をもう一回考えなおさないと……。実は、名古屋では区政協力委員長に話を聞くのが一番難しい。というのは毎日あらゆる会議が多すぎて……。地域で素朴につながって助け合いたいってことができないくらい、民生委員はあまりにも仕事……。もう一つは単独世帯を考えた時に、町内会がそういうふうになかなか簡単に変わらないという面があった時に、生協がどれくらい単独世帯に向いているかといえば……。6枚切りのパンを買う、必ず残り3枚は冷凍庫。つながり方も含めて商品の購入とかも含めて、世帯構成が変わっているというリアリティをうまくとらえていないと、単純に地縁、選択縁ではなくて、……。

●仲田：あつという間に時間が来てしまつて……。何か結論を出すというふうにはならないですから。今日参加されている方には、一言ずつぜひ感想を含めて聞きたいと思ひます。

●豊田：僕らの団体は、地域のつながりというのは課題で、やはり難しいのかなど。今、NPOのいろんな支援団体とのつながりというか、行政とのつながりはできてきているけども、地域とのいうところはなかなか難しい。僕らも含めてそうですけど、つながりが大事で。寄り添える場所があって、その中でもうひとつ、若者たちの寄り添えるようなところがくっつくといいか、導いてあげていけるような。そうやってくるとそういう人たちが入ってきて、一緒にやれるといいか。そんなことができそうですと思いました。みんなを連れて、一回のぞきに行きたいと思います。

●飯村：出会いをすべにつなげて、というところがすごいなと思って。私も個人としては、社協さんや医療福祉生協さん、ボランティアやNPOとつながっているんですけど。それが横につながっていかないとかがもつたいたいと思いつつ、自分に何ができるのかな？というのがある。そのつながり方がなかなかうまくいかれないので、みなさんにいろいろ教えてもらって。いろんなラッキーな出会いがあるもんやなあと感じているので、そういったところにつながっていきけるように頑張っていきたいと思っています。

●幸松：私は三重県の名張市から来ているんです。三重県の名張市は名古屋市と同じような、名古屋では地域づくり委員会、地域づくり組織が中心になってやっているんですよ。そこにはNPOがなかなか連携ができていないんです。名張の市民のかたっているのは、NPOは金もつけ集団。そういうかたとか、昔から〇〇した人が悪いことをされた例もあって、NPOはイメージ的にいい意味に思っていない。名張市には一

二つ、全国にひっするようなNPOがあるんだけど、ここが全然。名張市に30ぐらいあるNPOの連係ができない。全国には名前が通じているのに、名張では全然名前が通じない。そこは地域づくりとも連携できない。こういうNPOの現状があるだけに、私としては見えていて非常に残念な気持ち。

それと社会福祉協議会、ここがボランティア協会を運営しているんだけど、これが10年間でどんどん減ってもうて、ボランティアの協会の団体が1500ぐらいあったのが、今は800ぐらいしかない。ここも社会福祉協議会と連携し合っているかというたらやっていなくて、ボランティアというのがもう一つ。だからNPOもボランティアももう一つ。その中で地域づくり組織だけはどんどんと、名張では。ですから、社会福祉協議会はここと連携しようとしている。

今ボランティアの会長をしている人が、NPOもやっているんですよ。NPOで地域組織といっしょにくと、うまいこといけん。ボランティアの会長としていくと、うまいこといく。NPOでいくとイメージがいかんけど、ボランティアという形でいけば、いける。そうするとこれから考え方として、NPO中心じゃなくて、ボランティアを中心にしながらNPOのかたちとか。。。名張ではそういうったかたが、本来ならばNPOがもっと地域で連携しなければいかんのだが。。。みなさんのお話の成功事例が、もうちょっと長くかかるなあというようなところが名張でして。地域福祉を中心にやっている中で、民生委員のこともあるし、ほんとうに今認知症が増えていく中で、だれが管理しているかといえれば、民生委員さんでは管理でき

ひんわけですわ。これから、認知症のかたに対して、NPOもボランティアも含めどうしていくかということが、我々のところの今の地域福祉の課題で。ここに生協が全然加われていない。全く生協がまちづくりに入っていない、というようなところが現状で。今、伊賀市の生協の方が「これじゃあかん、まちづくりを一緒にやらないかん」ということで、この間私に相談されて、来年くらいからそろそろ入っていかというような話ですので、これからが面白いなというような感じが名張の状況なんです。

●仲田：この新しい取り組みがきつと名張の参考になるんじゃないかと思しますので、コープあいちも最新事例を作って……。

●内藤：私が生協に入った頃に、地域事務所の拠点が昭和区にあったんですね。拠点があつた時はなんとなくそこに人が集まっていたから、拠点を作ったら人が集まるんじゃないかとすごく安直に考えて。自分の家が空いた時にそういう……。保育園が借りてくれたんだけど、今誰が借りてもいいリーススペースを作ったんだけど。自分が仕事に入っちゃうと、それ以外も保育園の中で仕事しているから、そこにいるのは二日間あけているんですけど、私は9時間入っている。けどそれ以外はいろんなお母さんが入っていて、それ以外はずっと空いていて、いろんな人が使えるようにはしたんだけど……。かぎの管理なんかで、24時

間そこにいるわけではないので・・・部屋は貸してあげるよ。そこで昔の親子劇場のメンバーはまだまだ活動している。

地域で社協センター祭りをやっていて、高校生や大学生が集まる。居酒屋には行けない高校生や中学生はグループで集まる。宿泊可寝袋可で場所づくりはしているんだけど、それ以外に広がっていかないだね。それをどうしたらいいかな？というのが今の最大の課題。自分たちの事業として名古屋市の助成金を受けて、子育て広場は順調にいらっているんです。ですけど、もう一つその上をめざさそうと思うと・・・。

もう一つ出てきている話は、共同保育所を作れないか。2階のスペースが空いているので。今、待機児童がすごく多いじゃないですか。その中でも三子目の子が保育園に入れないとか。そのお母さんたちが困っていて、OBの先生が入ってくれて、週に3日だけでも預かる場所にできないか。その場所を提供しようかという話を始めたんだけど、なかなか形になっていかないのは、何がネックなのか？ 場所は作ってある。

人がそこに集まらない条件が・・・一番の問題は駐車場なんです。そういうことも含めて、商店街でもないところで野菜を売ってはみたものの・・・売れないわね。いろんなことをやってみただけど、なかなか地域の拠点になっていけないし。もともと私は昼間はいなかったもので、地域の場所がなかったかもしれないけれど。地域が大事で帰ったけれど、地域にいない人なんだなあと思ったし・・・。拠点は作ったけど、まわす人を育てていない。次の人が育っていないから、集まることはするんだけど、運営を一緒にやるとい

う人はなかなか見つからなくて。そこらへんがジレンマ。

●服部：私は始めたときは二人だけでしたよ。

↓内藤：だから、二人いるでしょ。

↓服部：二人いるといいかもしれない。広がって。今、50人が会員で、会員以外もたくさんいる。会員を増やすことにはあまりエネルギーを使ってきていない。周りの人が・・・。

●内藤：運命共同体になる人がいなかったことが私の一番弱かったところと反省して。長いこと生協にいたけど、作れなかったと反省したんだけど。でも、今、少しずつ芽が出てきて、白メダカをいただいて、人懐っこいメダカで、レンタルで・・・1週間だけ子どもが飼いたいという人がいっぱいいて、鉢ごと持って行く。子どもを増やそうねというのを来年に向けて企画しようと思っていて。メダカの学校というのをしようかと。お母さんたちの中ではすごく新鮮で、ホームステイさせてこのメダカを、というのが今年の大ヒットで。それでちょっとつながっていきけるかな。次の世代のお母さんたちが育てて、また帰ってきて。うちでホームステイしたよみたいなのが、広がっていくといいかな。がんばってやりたい。

●伊藤：内藤さんのところの子育て広場は、何時から何時まで？

↓内藤：9時から2時まで。二人の方が9時から2時までいらっしやいます。毎日二人、子どもを連れてお母さんペアで、朝9時に来て2時までいらっしやいます。家にいられなくて、逃げる場所がうち。

●仲田：ありがとうございます。次は松浦さん。

●松浦：私は本当に狭いエリアで活動していて、区長さんや民生委員さんが大変なんで、その部分を私たちがやっていきたいなという思いの「さんあい」です。小木曾先生が書いていらっしやるんですが、支援者が支援される側にまわっていくということと、こうやって回転していくといいなって思っていたんですが。近所よりも遠くの知り合いに入ってほしいという話を今日聞いて、そうなるとうまく回っていかないのかな？でもそんな人ばかりじゃないので、回っていけると思ったのと、自分の家に長く住んでいるんですけど、生協の活動をずっとしていて、地域の人の顔と名前がわからないので、反対にやりやすいのかな。顔がわかっていると、この人はこういう性格だからといって一線を引いちゃって動けない。4人でやっているんですけど、3人がみんな動けない状態の人なので。私は生協の活動をしていて地域を知らないんで、どんどんあたっていけるかなっていうのがあって。服部さんの話を聞いて、私のここが強みかなと思って。今日は弱みと強みの両方を知ったのかな、頑張ってるよ。

●服部：「職人参道」がそつだと思っんですけど、私たちは陶器関係でもなんでもないので、一般市民で。だ

から逆に土屋さんとか窯業関係、声をかけても「参加しましょうか」ということになるけれども。もしこれが関係者だったら、あの人の関係ならやめようかというような難しさがあつたかもしれないが、むしろ何にもないから逆に参加してくれた。

●幸松：障がい者の方は、自分たちの障がいのランクを知られたくない、認知症の方も。だから近くの人じやなくて遠い人のほうがそういったことに対して安心できる。周りの人に知ってほしくないわけです。これが一番問題です。

●椋木：事務局からは、今日の資料の最後に、中道さんが研究センターNEWSの巻頭に書いてくださったもの。中道さんはパネルの世話人のメンバーで、ここでやっている事に共感していただいています。あらためてプライベートネットワークについておっしゃっていて、これを生協と絡ませて考えてみる事ができたんです。文章の終わりの方で「社会的資源を使って・・・だからといって決まってしまうケースが多くな」ということに気が付きました」というふうにおっしゃっているんですね。それで、そういうものではなくて、プライベートなネットワークを充分理解して、それを活かしていくということが重要なんだ、ということとを、実体験から見つけ出された。生協の活動をやってきた経験を振り返って、生協はそういうことができる組織じゃないかと思えるんです。やや最近、この先、それが続けられるのかわかっていう不安はありますが、生協こそそういうプライベートなネットワークが作れる、制度で救っていけないという話がありました。

が。・・・ということまでこれを載せさせていただきました。それと、レジュメの裏に小木曾先生からのメッセージ（メモ）が。

●服部：地域と協同の研究センターに育てていただいています。いろいろやっていて、勉強してこういうことをしているわけではないんです。専門的なことを学んで、やる中で、これははたして社会的なポジションはどうなんだろう？とか、こういう場合はどう考えるといいか？とか迷う時に、地域と協同の研究センターを見つけて、話す場所があって。どう思いますか？それでいいと思います。あそこは瀬戸の中でも高齢化率が高いところなので。

実は今日ここへ来る前に、1週間ぶりに見たおばあちゃんは90歳以上のおばあちゃんで、窯の広場で倒れて救急車。ちょうどお祭り（職員参道）をやっているときに、5日間入院して、退院してここに報告にみえて、ご飯を食べて。大事にはならなくてよかったです。当事者ではなく、当事者の隣のおばあちゃん「わしは毎日冷麦をゆでて届けているんだが、あの人は死んでしまう、ほっとけば。どうしたらいいか？」と汗を拭きながら相談に来て。「介護保険払っているでしょう。」「そんなことも知らないですよ、高齢者は。私たちも制度の詳しいことは知らないけど、高齢者はもっと。お金を払っていても天引きされているので、掛けている事すら確認できない。だからまずここに話をしに、隣の人なんですけど。そしてお弁当を届けてもらうことになって、今日は味見だ。そういうすべての困りごとが来る場所になって来たんです。私たち

は、どうしようどうしようと言ってつなげているんですけどね。やっぱり生協は店舗がいっぱいあるし、そういう場所になればいいんじゃないですか。

●鈴木：私も十数年前瀬戸に住んでいまして、あの当時は大変な時期で、今後どうなるのかと心配しつつ転居したんですが、今日は新たな拠点ができて・・・また行ってみたいくなりました。今日も報告していただきまして、この場もつながる場ということが再認識できて、頑張らなきゃいけないなと思いました。

●向井：前田さんのいた多摩って、30年前に私が調べたレポートでも登場した地域。西郊消費組合っていう戦前の消費組合が、当時の日本で一番早く「班」を作った地域です。それが戦後につながって、班が大事だということ、鶴岡生協が学んで。東海では、田辺さんたちが班が大事だと共同購入班につながった。

一方で町内会・隣組とか戦前の上位下達的な組織論ではうまくいかないということで、戦後憲法の中でそれにかわる協同組織を作ろうということで作られたのが生協法であるという関係です。市民的なつながりももちろん本質にあるんでしょうけど。人と人がつながろうとしてきた息吹が、いろんな時代の中でかわりながらすすんでいると思って、それぞれの話を聞く面白いです。

●仲田：運営に協力していただいてありがとうございます。次の議題に移る前に、報告していただいた4人の方に、お礼の意味をこめて拍手して終わりたいと思います。では向井さんにバトンタッチします。

●向井：あらためてテーマのなぞりですが・・・、

河田さんの報告された事例は「協同組合が地域とつなげますか？」という問いかけなんです。

愛知県が地域はつなげなければいけない。コーディネーター役が必要だ。NPOにも依頼したけれども、今度は生活協同組合がつかないでみてください。それが今、必要な地域力を作ることではないか。協働ロードマップを作るモデル地域の取り組みです・・・そういう瞬間、つなこうと思ったら、「何であんだ達企業なのよ」にやるの「とか」「忙しくてやっとなん」と否定的な言葉ではないですが、「そもそも何をやりたいのかよくわからない」と言われたとか、「そんなに大がかりだと私たちがやろうとしたリズムと合わないから、ちょっと待ってよ」。「生協が入ってきたって競合するから参加見合わせる」とか・・・。それぞれの地域ごとに肯定的でない言葉があります。協同組合が関わろうとするときにそういう「一つ一つが、今の実態を解する言葉だ」と思います。大きな意味では、このモデル事業から「地域福祉を支える市民協同」における協同組合の可能性と実際の光の当たり方を、地域のみなさんから語ってもらいたい。

服部さんの経験は、事業的な発想があるかもしれないですが、やはり協同組合も行政も職員もみんなうまく使っていますよね。好きなように使いこなしている。使いこなす原点がシンプル。よりよいまちを作るためにやっているんだけど、それが仕事おこしであったり、事業化しなければいけない視点がある。協同組合は、

服部さんたちが関心を持ってパートナーとしている入口でもあり一つの切り口かな。起業力みたいな、自分たちの力で問題解決する、継続的な事業を作る経験をもっている市民組織ということかもしれない。

前田さんの話にあったように、それは一人一人の、協同組合の中のネットワークがつくっている事は間違いないのだけれども。あらためてそれを社会的にみると、やっぱり高度経済成長の中で出てきた、地縁組織と志縁組織の関係が変化していく過程、志縁組織が地域の変化にしっかりと関わりながら進んでいるのではないかと、という議論を前回しました。そういう意味で、組合員、つないでいる人たちの生活そのものも、高度経済成長の中で発展してきた生協の一つの側面であるとしたら、最後に言われた「くらしも商品構造も利用も家計も世界も、構造的に変化している。その変化を協同組合がちゃんとわかっているか」というコメントは非常に大事なことで。そういうことに気付かずに事業的にやれば何とかなるとか、組織が大きくなればとか、そういう論理ではないということが、冷静にそこを見なければいけないということが、面白い。

土屋さんのコメントは、僕が土屋さんのメッセージから聞いたのは、そういうふうに使ってきた人たちではなくて、今もボランティアで無償で、収入があるんでしょうけど、そういう人たちがやっているよ。魅力があり自分たちの地域を医療福祉として10年間やれるからやる。医療生協においては、地域生協が感覚的に持っている担い手の歴史的な制約みたいな、そんなことないよ。もっと実践的な担い手論をやっておられるので、それがどうやってできているのかということも、ゆ〜ゆ〜はもうちょっと勉強することによって、

協同組合が持っている、人の力の引き出し方を問うことを学ぶことがあるのかと思いました。

今日は協同組合の関わり方を丁寧に行っていることと違うことですが、かなりの接近できたと思いますので、次回以降のところ、今度は、協同組合トータルに事業であったり、職員であったり、協同組合総体として地域福祉や市民協同にどう関わるかという話になります。そうすると、さっき幸松さんが言われたように、いやうちでは全然見えてこんよとか、どうなったかんだという話があって、それに協同組合はどう応えるか、ということをやらないと。一般論として議論しているだけではいけないので。パネルとして、そういう問題提起をすることになるのかなということも思いますが、それがどういうメッセージになるのか。

お願いしたいのは、その中の産物が全回の冊子、これに登場する人は自分の原稿にチェックを入れて。パネルの出版物として出しましょう。できれば研究センターHPからダウンロードできるようにしましょう。

松山で同級生に会ったんですけど、県庁の職員なんですけど、たまたま発達障がいの子どもたちを県の教育がどう扱っているかということをお酒飲みながら怒っていたんです。3年間子どもたちが無事にそこを卒業すれば、役割はおしまい、問題を起こさずに卒業させる。親は知られたくないと思っている。親の気持ちを受けてそのまま何もなく過ごすことが目標であると。あとはバトンタッチする。その人たちが社会で自分の力で生活できるかとか、いろんな人たちとの接点で乗り越えるとかに全然問題意識がないんだ。親がそれを望んでいると、教育委員会も変わらないという話を聞きました。

逆にこういう議論ができていくということの意味がすごく大きいと。こういうものを発行してちゃんと議論として発信するということが大事だなと思って。みなさんが、世の中への情報発信の場への参加として。

●仲田：座談会のまとめの表も入れたほうがいい。

●向井：地域福祉を支える市民協同というテーマについて、世話人会で2年ぐらい報告し合ってきたんですけど、もう一度全体像をちゃんと抑えるために、集中的にやろうという連続シリーズの第3回目なんです。

1回目、支援組織は今地域にどう関わっているかということを報告していただいて。2回目は志縁組織からという座談会。今日は3回目で、協同組合に関わりを持っている人たちから話してもらった。地域を支えていくというのはどういう組織がどう関わり合っていて、どんな課題があって、どうやってみんなで作ったらいいかということのをまとめるための研究的な話し合いをやっています。次も同じように、コープぎふさん、協同組合が地域に、あるいは協同・・・地域にかかわる事例を。パネルとしての成果を作っていきたい。これを冊子形式にしてみんなに。

2013年1月28日発行

NO.2

2012年10月26日

地域福祉を支える市民協同パネル・世話人会

「生協の地域での関わりをていねいに視る」

発行:地域福祉を支える市民協同パネル

〒464-0824名古屋千種区稲舟通り1-39 地域と協同の研究センター

TEL:052-781-8280

FAX:052-781-8315